

養蠶地にふさはしき桑の大神木 (附寫眞一葉)

和田千藏

郷土養蠶地の中心三戸町に、見事に成長した大桑樹がある。地方人はこれを桑の神木と崇めてゐる。私は去年の八月現場視察に出かけましたが、實に立派なもので『あゝ大桑や大桑や』といふより外なかつたのである。これからの大桑の樹相や由來に關する御話を致します。

一
大桑の所在地は青森縣三戸郡三戸町大字川守田宇大明地十五番地似鳥新六氏の宅地内である。東北本線三戸驛の西南國道約一・九〇軒で此所に到着します。こゝは熊原川沿岸の段丘で地質は第三紀土性は腐植質壤土から出來、表土の酸度 pH は六・五地下水の pH も六・五で弱酸性の反應を呈してゐる。表土も深く一般農作物はよく繁り、梨、柿、桐、槻等木本類も、大桑と共に非常によく伸びてゐます。

二
大桑の品種は山中高助の雌株で只一本存立してゐる。樹高は地上約一二・二〇米(約四〇尺) 主幹は略々伸直で地上三・五五米(一一尺七寸)の所迄は太さが略々等しく、樹膚の縦走せる木栓層條溝が著しく發達して外面は頗る粗糙である。而して膚表の一部分には拳様の肉瘤が列生し樹

養蠶地にふさはしき桑の大神木

勢の絶倫さを發揮してゐる。幹の太さは根元の周圍約三八三米(約一二尺六寸餘) 地上四〇纏の部位で約二・四〇米それより五五纏上方の處は約二・三〇米(約七尺六寸) 更にそれより二・三七米の上部は約二・二〇米(七尺二寸六分)といふ風になつてゐる。

主幹部に於ける主枝の分岐状態は、第一回分岐部即ち下方にありては主幹に發生した三本の力枝から成り、各枝の太さと附着部とは夫々一樣でない。今地上距離の順位によつて記述すると、大桑の正面向つて左側地上九五纏の所から出てゐる枝は三枝中最小で、基部の周圍約六五纏に達し、地上約三米を抜いて横に延散してゐる。次の主枝はその背側面地上約一・七〇米の所から發生し、主部の周圍が約七四纏で約四十五度角に伸び、その先端は次第に垂下がり地上約三米の高所に枝條を分生してゐる。他の一主枝は地上約一・二五米の所から向つて右側に發生し、三枝中最大なもので主部の周圍約九一・五纏に達するが、枝端は前者と等しく地上約三米を抜いてゐる。これ等三主枝の葉は上方の樹蔭を受けてゐる關係上概して小形である。第二回分岐部の主枝は主幹より發生した定芽の發育により、地上約三・五五米(約十一尺九寸)の處から三岐し、一本は伸直に發育しその幹圍約一・三一米(約四尺三寸二分)に達し、背面にはやゝ大なる腐朽裂隙がある。向つて右側の主

枝は基部の周圍約一・一〇米(約三尺六寸三分)左側の主枝は周圍約一・二〇米(約三尺九寸六分)に達し、何れも發育旺盛で横枝を簇出し該樹の本體を構成してゐる。この上部は次第に細まり再三岐してゐるが、中央部の心幹部は大正九年の暴風に惜折されましたから、現在は主枝共に直立梢となり相對峙し各分枝梢は天空に聳え、全樹冠の推定領域幅は東西約二〇・四〇米南北約十八米で、葉はやゝ小形であるがよくつきその蓄積推定量約百五十貫とされてゐる。果實は一年隔に結び粒は大形で甘味が強い。根は土層深いため根際に於て地上に露出することは至つて少く、支根は放射狀に瀾漫して遠く一〇米餘の地點に達してゐる。

三

大桑の由來を申上げますとこの植付年代が詳かで、三戸町大庭勇助氏が當地の養蠶業を發展させる根本の目的で、福島縣から明治七年に傘取法によつて仕立山中高助の苗木を、明治八年の春初めて當町に移入し、その一部を元當町長諏訪内氏の畑に植付け、その殘部の苗木は役場で保管してゐたが、翌九年には長くも 明治大帝東北御巡幸のみぎり、先代似鳥新六氏が役場から六本の苗木を譲り受け、自宅裏の畑(現在の)と山の畑とに記念栽植をしたものゝ内一本は現在の大桑となつたのである。諏訪内氏の桑も似鳥

氏の他の五本の桑も、虫害の爲巨樹に達せずして皆伐採されたが、獨り現在大桑は環境當を得たばかりでなく、先代新六氏は同樹に對する愛護の念頗る強く、肥料として酒粕を與へ葉は絶對に摘採しないなど、頗る周到な肥培管理を續けた結果、發育が年増に顯著となり、植付後廿五、六年で既に大樹の特徴を發揮し、その名聲を博すると共にこれが參觀者も多くなり、明治卅五年には時の地方長官山内一次、同四十年には同西澤正太郎閣下に現地視察の光榮を受けた。當時に於ける主幹の太さは胸高部は約五尺であつたといはれてゐる。その後農林省その他の蠶絲關係の幾多名士も萬來し、その都度該樹の成長振りの驚異を賞讃され、且將來保存の必要ある旨の辞を辱うしたのである。而るに大正九年の大暴風は心梢を折り幾分樹高を損じたけれども、昭和六年には胸高部の周圍約六尺に達し、現在は七尺六寸になつてゐるから、一年平均約一寸餘の割合で肥大したことが判ります。この様に持主に愛撫されつゝ生長して來たのであるが、昭和十一年十月三日に突發した當地未曾有の大暴風のために、亦もや第二回目の枝折が起つた、恰度午後十一時半頃第二回分岐の南奇りの主枝が幹の附着點から裂けて、樹下に植ゑられてある柿樹一本を根こぎにして倒れたのであるが、被害はこの太枝一本だけであるから樹體の生理上大した障害が及ばん様子である。

この大桑は明治九年に植付けたもので、昭和十一年で恰度六十の齡を迎へたことになるから本校の創立と同齡である。この間二代の持主に保存され二回の暴風の害を受けたが、現在では樹勢も年毎に強くなり、將來に富む養蠶地に於ける唯一の模範桑樹となり、最初當地に培養桑を移入した歴史を物語る様になつたのである。

四

大桑と郷民との信仰關係は仲々面白い地方人はこの大桑を蠶桑の神木と崇め、持主は上記の如く葉を育蠶用にすることを禁じ、色々な吉凶判断に應用してゐる。即ち大桑の秋季に於ける落葉状態によつて年の豊凶を占ひ、落葉が樹下に厚く堆積すると翌年は必ず豊作で、これと反對に落葉が諸方に飛散し薄く積る時は凶作で油斷がならんと信仰してゐる。この豫察はよくあたるので最近あつた冷害的凶作の前年は何れも薄く積り、昭和十年の秋には極めて厚く堆積したから、十一年度は凡て豊作であると喜んでゐましたが、なるほどよくあたつてゐる事は面白い。この事が地方人に判つてゐるために、落葉の時事には物好きな古老や百姓達が非常に雑踏して似島氏宅に押かけてくる。それからこの神木の枝梢が折れると不思議に持主の家に不吉なる事件が起ると話してゐる。而して神木の落葉は肥料にはしな

養蠶地にふさはしき桑の大神木

いで必ず豚の飼料に供する、豚はこの葉を無二の好物として喰べるが、發育が非常に進むばかりでなく、健康も増進してゐる、而してその肉質も特によく風味も一層高まるといはれてゐます。それからこの果實（桑葚）の熟期になると、樹下に席をしいて落果を集め、これで桑酒を醸して子供達の保健飲料や一般の中風薬治に用ひてゐる。

この様なこの巨桑に對する郷民の信仰關係上、近時持主はこの樹下に南部蠶靈神社を最初移入當時の桑樹を材料として建設し、地方養蠶業の繁榮を祈らせる計畫を進めてゐます。

五

神木大桑を植物學上から説明して見ると、

元來クハ（桑）*Morus alba* *Tinnæus* の原産地は東部亞細亞と波斯で、適當な土地に植ゑておくと幹圍五尺か六尺、樹高は二十尺位に達するものであるが、通常三、四十年を経過すると虫害のため疵を生じて枯死し易く、又刈桑とする時は十七、八年で株は衰弱するものである。我國現存の大桑と稱するものは二、三見えてゐる。就中福岡縣筑紫郡山口村木屋町（二日市から南方約四軒）にある二株は有名である。植付年代や品種名も不明であるが、次の測定表に示す通りに大きいものである。又青森縣下北郡大間村にあ

養蠶地にふさはしき桑の大神木

老桑は、上部は風害のため折れ、その痕は大部分腐朽してゐるが、幹の太さと年輪の多い點に於ては全國的の巨桑といはなければなりません、これ等三巨桑と三戸の巨桑と比較すると次の表の様になります。

比較	巨桑名		品 種 名	樹 齡(年)	樹 高(尺)	根元幹圍(尺)	胸高幹圍(尺)	測定年代
	山口村の大桑	大間村の大桑						
	其一	其二	?	?	約三〇〇	約二〇〇	約六〇〇	一九二六
			?	?	約三〇〇	約二〇〇	約七〇〇	一九二六
			山中高助	約一五	約(殘槽) 九〇〇	約三〇〇	約八〇〇	一九二六
			山中高助		約四〇〇	約三〇〇	約七〇〇	一九二六

上表より大間村の巨桑は胸高幹圍最大であるから、腐朽しなかつたならば樹高に於ても、日本最大のものであつたに違ひなかつたが、最早腐朽し名木と稱することの出来な事は遺憾である。又山口村の大桑は往年暴風のために太枝が折れた上に、葉は養蠶用に採取されてゐるために樹勢が頗る弱つてゐる。然るに三戸町の大桑は凡ての測定結果は前者に比し遙に大きく、而も樹姿完全、樹勢旺盛で將來益々肥太伸長する餘裕を持つてゐるから、先づ日本一の巨桑と稱誇して差支ないと信じます。

六

之を要するに三戸町の大桑は樹齡六十に達し、植付後持主の熱誠ある愛護を受けた結果、樹高、幹圍、樹姿、樹勢等が外の地方にある大桑に卓越し、何時しか郷民の蠶靈神仰の目標となり、桑の神木と崇められ樹下に桑作りの南部蠶靈神社を設くる計畫迄見るに至つたのである。而して縣下養蠶業の中心地に最初に移入した桑苗を、畏くも明治大帝東北御巡幸の明治九年に記念栽植されたといふ、畏き由緒を有する大桑であるから日本國中に類例がなく、學術考證上竝に思想善導上無二の好資料で、當に三戸町の寶であるばかりでなく日本帝國の貴重なる寶物であると認めます。然紀念物に指定し永遠に保存する必要があると認めます。本稿を草するに際し三戸町助役堀口留吉、三戸小學校高野銀藏、小井田幸哉諸氏並に大桑持主似鳥新六氏に對し、諸種の御盡力を賜はりましたことを忝しく感謝致します。

(昭和十一年十一月)。

引用文獻

1. 三好 學 山口村の大桑。天然紀念物及名勝調査報告 植物之部第七輯四十一乃至四十二頁 昭和二年 内務省

2. 牧野富太郎 植物學講話 五十頁 昭和七年 和田邦男 (以上)



—— 氏六新鳥似主持と桑大木神の戸三 ——

(影撮日二廿月八年一十和昭)

昭和十二年四月七日印刷
昭和十二年四月十日發行

〔非賣品〕

編輯兼 築山治三郎
發行人

印刷人 今 薰
青森市外荒川村字藤戸八十八番地

印刷所 青森刑務所作業課
青森市外荒川村字藤戸八十八番地

發行所 青森縣師範學校郷土室